

## 室田保夫さんとの思い出と福祉の歴史研究についての断想

関西学院大学非常勤講師 田 中 和 男

室田さんもめでたく(?) 諦念に達したということで少し書くスペースが貰えるということで考えてみました。先生と書くべきでしょうが、私が先に生まれたので1年数か月も若い人から怒られそうだし、知り合った頃は、室田氏と呼んでいたのが、最近は室田さんに替えて四から三に格下げしましたが、思い出を中心に語るこの文章では室田さんと呼ばせてもらいます。

室田さんは2012年に『近代日本の光と影』(関西学院大学出版会)の刊行に際しての出版会のPR誌『理』(30号)の「自著を語る」の最初の部分にこんなことを書いている。「小生は戦後のいわゆる『団塊の世代』『全共闘世代』であり、大学生活は『政治の季節』そのものであった。今のような便利な社会ではなく、学生は大方において貧しかった。入学当時の明治100年の節目は、未来に対する夢、明るさのようなものが存在し、右肩上がりの社会は経済の謳歌であった。しかし、そこに素直に溶け込めず、それへの違和感を抱いていた」。

戦後のベビーブーマーに属し、高校時代に東京オリンピックを見て50年前の1967~68年に大学に入った同世代の私たちですが、互いの大学時代は知りませんでした。その頃は御所を挟んで東にあった立命館大学(日本史専攻)から北北西に進路を取って1970年に同志社大学(法律学専攻)に3年に編入したので3・4回生の時代を共有している。学内・外の学生集会で顔を合わせたかもしれない。大学を辞職した鶴見俊輔の影響が残った山田慶児たちの自由大学にも出ていたというからその程度の「政治の季節」を共有したのかもしれない。室田さんと私が面識をえたのは75年ごろの同志社大学院の頃でした。室田さんはストレートに大学院に進学したのに対して、私はわき道に入り74年に同志社大学院に入院しました。

政治学専攻で思想史研究をしようとしていました。政治思想史は丸山眞男などの影響が強く、私の指導教授の脇圭平先生も丸山門下で、福沢諭吉やH・アレントなどの傑出した思想家の国家論や自由観などを分析することが求められます。修論のテーマとして日露戦後の国民統合の政策である地方改良運動を取り上げようと考えました。吉野作造や柳田国男が活動する大正デモクラシー研究に新しい見方を提示するためにも、その前提として地方改良運動の検討が必要だということです。地方改良運動は、日露戦後経営の一環として「国家のための共同体」を再構築するためのものあり、同時に行われた感化救済事業も財政緊縮を目指す補完的な政策に過ぎない。こうした観点は現在の社会事業史でも通説のようです。私は地方改良運動の中に大正デモクラシーにつながる下からの利害主張や政治参加の理念の提示があったのではないかと考えました。地方改良・感化救済事業講演集などを読み解きながら、二宮尊徳の報徳思想を基盤にして、宗教家・地域名望家などの四角同盟が地域を改善する主体と考える留岡幸助に注目し、留岡を官僚側の権力的な国家統合の方向を批判・相対化する人物として考えるようになりました。

今から考えると、私の無知を晒すようですが、留岡幸助が足許の同志社出身のクリスチャンで、社会福祉の歴史ではかなり著名な非行少年の更生施設「家庭学校」の創設者であることは全然知りませんでした。地方改良運動の中での感化救済事業の意味もはっきり理解してはいませんでした。社会福祉の歴史についても関心の外であったのです。社会福祉についても同様です。都留重人や宇井純が指摘していた公害問題についてぐらいは関心を持っていましたが、福祉の領域やその歴史については考えが到っていませんでした。室田さんが、高度成長の真ただ中に右肩上がりの発展に「違和感を感じ」て福祉の歴史研究に進んだというのは、室田さんならではの感受性の表れでしょう。その感受性は人物に関する関心、人物の中にある福祉への志、広く言えば浪漫主義的な心情への共感に連なっているようです。福祉に現状についての研究ではなく、福祉の歴史、それも福祉を発展させた人物の先駆的な情念に焦点を据えたのでしよう。

70年代にすでに同志社大学人文科学研究所の内部で杉井六郎先生が主宰する留岡幸助研究班が組織され、その著作集の刊行に向けた研究が行われていました。それについても知りませんでした。妻同士が友人であり、留岡研究会の補助者をしてきた人文研究科（文化史）の院生・山本幸規さんが、留岡研究班のメンバーで修論で留岡を扱うという若き室田保夫さんを紹介してくれました。室田さんは、研究班のリーダー杉井六郎教授の指導の下に、留岡関連の様々な資料、場合によっては生原稿を読んでおられる様子で、多くのことを教えられました。室田さんにとっても、杉井先生の下でその実証主義的な方法を学ばれたのは、学者としての活動の基本を作ったものと思われます。多くの資料を蒐集・比較し事実を一つづつ確定することで歴史叙述を展開していく実証主義的な方法は歴史研究の要諦ですが、源義経のような発想飛びも裏ワザとして否定しない政治思想史研究の学徒にとってはなじみがたいものがあります。室田さん・山本さんの仲介で杉井先生にも許可を頂き人文研の留岡研究班にも参加しました。研究紀要（『キリスト教社会問題研究』28号）の留岡幸助研究特集号にも書かせていただきました。その後も、室田さんに誘われるようにして、人文研での研究会で山室軍平、石井十次などの研究に参加し、社会福祉の歴史の事情が少しずつ分かってきたのかと思います。大学近くの喫茶店「わびすけ」で一杯のコーヒーで何時間もねばっては行った「読書会」での研究成果として、日本生命済生会発行の『地域福祉』に投稿した共同執筆の論考が2本あります。地方改良運動や「中央慈善協会」の機関誌『慈善』を社会事業史的な分析を室田さんが、官僚・政治家の政治思想的な分析を私が行うというそれぞれの研究方法で分担する方法を取りました。室田さんは奈良文化短大から高野山大学の専任に就職される前後のことだと思います。その後、老舗の喫茶店はつぶれてしまいました。

この頃、同志社大学の福祉学の教授で、室田さんの指導教授の一人でもある小倉襄二先生の大学院の講義に室田さんの手づるで「非合法」で潜り込ませてもらい、遅ればせながら社会福祉のイロハの「あ」を学ばせてもらいました。1977年には、小倉先生が中心となって関西社会事業思想史研究会が開始されることになり、その頃は若手であった室田さんだけではなく、龍谷大学の加藤博史さん、日本福祉大学の永岡正己さんなど錚々たるメンバーと知遇をえ、様々な刺激を与えられました。しばらく後には佛教大学の池田敬正先生が研究会に出席されだし、お弟子さんの池本美和子さん、同志社の福祉学専攻から後輩の中西良雄さん、石井洗二さん、倉持史朗さん、さらに若手(?)として関西学院大学の今井小の実さんなど実力のある方々が参加されました。小倉シュレー(学派)が活動する現場に立ち会うことで、門前の小僧のように、小倉先生の主張される「底辺への志」を伴った福祉史研究の一端を身に着けることができたと思います。

先ほど述べました室田さんの人物への関心は、思想史研究の中では頂点に立つような著名な思想家の分析にも連なっています。若い時代から現在に至る室田さんの論文のあちこちに、社会事業史の研究論文にはふさわしくないような、「恋愛は人生の秘鑰」といった強烈な恋愛論を主張した明治初期の文学者・北村透谷が引用されたり、昭和の総力戦時代に軍部の侵略主義を果敢に批判したクリスチャン・柏木義円に対する関心が表れている。ただし社会福祉の歴史の中では、文学史や政治史が扱うような著名な人物ではなく、「地方」で活動する無名の人々が研究の対象とされる。地方改良運動そのものが、地方の名望家層を組織しようとするものであり、留岡幸助自身、内務官僚が主導する運動を支えた中心の一人ではあったが、政治の中では無名の一人でもあった。室田さんの留岡像も民衆の一員としての福祉実践家です。小倉先生の「底辺への志」論を歴史の中で忘れられた民衆を復権させる主張と考えて私は大いに納得させられたのでした。

私たちが社会事業史や政治思想史の専門的な研究を始めようとしたころ、室田さんの言葉にある「全共闘」運動の主張の一部にあった、近代批判や学者・知識人に対する批判は、歴史学研究の中では、近代化推進の理論に墮したマルクス主義歴史学(特に講座派)に対する批判や、民衆思想史の主張に現れていました。林羅山などの朱子学の自然法的秩序観が古学派の荻生徂徠の作為や制度、国学派の本居宣長などの心情と原日本の発見によって解体していく日本思想史を描いた丸山眞男に対抗して、60年代以降の民衆

思想史は、例えば安丸良夫は丸山が見過ごした農民や町人など底辺民衆の日常的な労働・生活の中にある通俗道徳的実践が欧米のプロテスタンティズムが果たしたのと同様に日本の近代化を実現したと主張しました。私の地方改良運動の捉え方も安丸良夫や鹿野政直などの民衆思想史的方法に影響を受けていました。近代の内容や近代化の方向が、欧米モデルに限定されないという21世紀の現在では当たり前の考え方が、ようやく社会科学の中でも浸透してきた時期でした。19世紀末にニーチェが神は死んだと云って西欧近代との決別を宣言しましたが、封建社会が進歩的な近代に発展するという大きな物語は日本においても終焉を迎えたのでしょうか。福祉の世界では1973年に高齢者医療の無償化などで田中角栄内閣が「福祉元年」を喧伝したのに、同じ年のオイルショックで高度成長は終わり福祉2年を祝うことはありませんでした。「わびすけ」での読書会や小倉先生の関西社会事業思想史研究会でも、個別の研究だけではなく、学際的な研究状況について大風呂敷な構想を広げあっていたのです。

大学院を修了した後も、同志社大学人文研の研究会で先述のように、留岡幸助に続いて、救世軍の山室軍平や岡山孤児院を設立した石井十次の研究に参加させていただきました。研究会の主宰者は専任の杉井先生、その後田中真人先生が引き継がれましたが、実質的には室田さんが研究の方向性や資料の所在の確認についてもかなりリーダーシップを発揮されました。室田さんは高野山大学の専任に就職されて、週に2泊3日、山での修行ではなくて講義を行った後、疲れた体で毎月第4金曜日の午後4時半から8時まで開催される研究会に参加していました。山室の研究では山室の著作の細目を手書きでカードにするという地道な作業を行い、石井の研究では、機械好き（機会主義者＝オポチュニスト？）な田中真人先生の発案で、石井日誌で石井の日々の行動をコンピューターに入力することになりました（その成果はそれぞれの『研究』書の巻末にまとめられています）。私は旧式の原理主義者で、研究の文明化については努力はしましたがちょっと斜に構えて見る態度に終始しました（日和見する人をヒヨリストといいます）。室田さんはオポチュニストだから割合早くパソコンにもなれたようです。その辺の室田さんの適応能力は、同志社の人文研の研究会ではクリスチアンの社会事業家やキリスト教各派の雑誌の研究をしながら、高野山では仏教系の新聞『六大新報』を使っての社会事業を分析している（『近代日本の光と影』所収）ことから明らかです。適応の良さはスポーツの趣味にも表れていて、同志社の学生時代から熱烈なラグビーファンでサッカーブームになってもぶれない。しかし、同志社チームを応援したはずが、関学の専任になると、ちゃんと関学チームを応援している。大阪花園にヒマを作ってラグビー観戦に赴き、同志社との試合でも当然関学を応援するという。野球はこれも熱烈な阪神ファンで、試合時間になると時々、携帯で結果を確かめて喜怒哀楽している。それでも、もし広島で就職していれば、熱烈なカープファンに変身していたと思われます。

しばらくして室田さんも私の福祉史での知識を承認されたのか、室田さんが関西学院大学社会学部にかわられたとき、高野山大学で室田さんが教えていた社会福祉の歴史の講義を非常勤講師で教えるように取り計らってくれました。そのため、私も本気で福祉の歴史の勉強をすることになりました。関学での歴史関係の講義の非常勤講師の仕事を紹介してもらいました。さらに刊行が何かの事情で遅れていたミネルヴァ書房の『日本の社会福祉の歴史』の執筆者に加えていただいたり、室田編著の人物で見るシリーズに、何人かの社会事業家・思想家を取り上げさせてもらいました。歴史の流れの中に人物を位置づけるという観点は、若い時代からの室田さんの一貫した立場であり、政治思想史のトピック的なテーマ設定に慣れている私にとっては、チャレンジングな経験でした。時代を背景にした人物たちを実証的に検証することは、先駆者としての偉業を顕彰するのではないとの自覚が前提です。ダジャレの好きな我々は「顕彰から検証へ」と表現したりしました。室田さん自身、最初の著書『キリスト教社会福祉思想史研究』では留岡幸助をはじめ救世軍の山室軍平、救世軍関係者として松田三弥などの周辺にわたる人物にまで視野を広げている。留岡については『留岡幸助の研究』を著されたが、それでも留岡の半生にとどまっている。留岡の後半生についての研究は室田さんにとっても、留岡研究の発展のためにもぜひとも果たしていただきたい課題ということです。留岡研究では、若い時代に同志社人文研の研究会に参加された教育史の二井仁美

さんや、部落史研究の関口寛さんがスキを狙っています。

お弟子さんの中から原胤昭、石井十次、久布白落実、林市蔵、糸賀一雄など人物に即した研究者が輩出しているのは、室田さんが学者・教育者としての社会的責任の果たしたことを意味しています。室田さんの退職記念の論文集にもその成果の一端が発表されると聞いています。室田門下生だけではなく、社会事業史、日本史研究の研究者によって人物に即した研究が多く発表されています。高瀬真卿や渋沢栄一などです。学際研究の必要性、あるいは外国からのインパクトなど、ある人物の研究を行う場合にも、多面的に考察する必要性が多くなるとともに、他分野からの研究者に負けないような実証性と獨創性をもった研究成果を出すことが求められています。確かに、希少な資料・文献をインターネットを通じて簡単に入手できること、大学院での博士論文作成についての様々な支援の制度、海外留学の道など研究環境が改善されている面のあることは確かでしょう。

しかし、社会事業史の研究を横から眺めていて思うことですが、社会福祉学の中での歴史教育や歴史研究の扱いは、それに携わっている人に大きな負担を与えている、あるいはハンディキャップを持たされているように思われます。歴史の関心が低下していることは、私の専門分野である政治学でも同様です。現代政治や国際政治の現状の分析と問題解決の具体的な対案が学問として求められるし、学生・院生にもこの志向が強くなっています。就職を考えるとそう志向せざるを得ないのが現状です。それでも政治学では、現場実習ということで、政治家の秘書として働くとか、デモの現場に赴くことが卒業の要件とはまだなってはいません。歴史の分野を研究する者にとっては現場とは多くは過去のことであるのだから、ドラえものの「どこでもドア」を借りない限り不可能というものです。

室田さんは割りとは現場主義で、留岡の出生地（高粱）、北海道家庭学校（遠軽）などに赴かれています。私などは居直って「現場に行かない歴史学」でよいと思っています。福祉学の研究者はそういった面にも気を使う必要があるということです。現場や実践の重視には福祉学の新しさにも起因している。政策としての福祉、要支援者への援助技術としての福祉は実際の問題が発生するのに応じて発展してきました。新しい福祉の領域は日々生まれているのでしょう。その研究者も現場からリクルートされている。でも、研究者として専門家として自立することは現場から離れる必要があります。物事を客観的に即自的に、第三者的に見ることが科学的観察の第1歩なのは説明するまでもないでしょう（ね）。現実を知るためには現実を経験する必要があると一般的には言えますが、殺人者の心理は殺人を実行しなければわからないといえれば精神医学の存在意味はありません。戦争体験はある世代ならだれもが経験したはずであります。体験は戦争についての認識を保証しません。

もう一つの問題があります。これは政治学でも経済学でも言えるのですが、歴史学プロパーの専門家は当然にその養成課程に資料の扱い方、古文書講読（日誌・書簡を含む）などについても教授されます。しかし、政治学、経済学、福祉学等の歴史分野を学ぶ者にはこうした技術や知識は十分には与えられません。室田さんは幸い、大学院時代から同志社人文研の研究会などで不十分ながら古文書の読み方を学ばれて、実際、生の資料を使っています。室田さんの歴史研究者としての強みもそこにあるのでしょう。「全共闘世代」とのからみでいえば、先に示したように、1960～70年代は、批判にさらされながらも大きな物語の影響が残っている時代であり、同世代の学生として共通に持つべきだとされる基礎教養があったように思われます。旧き良き時代でいうのではないのですが、ミエとしても知ってるふりをする必要のある知識です。マルクス、エンゲルス、レーニン（共通するのは唯物論ではなくO）であったり、M・ウェーバーなど、後にはフーコー、あるいはマイナーながらフーコーの影響を受けたドンズロ、日本では丸山眞男、竹内好、藤田省三、鶴見俊輔などの社会・人文科学者、保田与重郎、吉本隆明、高橋和巳などの文学者。ポップ・ディラン、ビートルズ（ジョン・レモン、リング・スター、ポール・マッカートニー……）、大島渚、若松孝二、岡林信康、南沙織、中島みゆき……。勿論、現在でも、ロールズ、ハーバーマスなど共有する知識はあるのでしょうか。

原典資料を正確に読み、関連領域の研究からの刺激を受ける環境をそろえることはなかなか難しいこと

だと思います。法学部政治学専攻でも英語などの原典講読はあっても古文書講読はありませんでした。福祉学の領域でもそれらを準備するのは大変です。でも研究の学際化は、福祉学専攻の歴史研究者と歴史学専攻の福祉研究者が対等に議論することが求められます。院生・研究者個人が自己責任でこれらを準備することは大変です。こうした制度を完備とはいわなくとも、ある程度準備することが、室田さんを中心にしてこれまで開拓されてきた福祉の歴史学的研究の持続的発展のためにも必要とされます。

このようなことを言うと福祉学研究者の多くから批判を受けそうです。それを承知で言わせてもらえば、日本の社会福祉の現実が解体の岐路にあるとみなされているように、日本の福祉学も変質の岐路にあると私には思えます。そのキャッチコピーは安倍晋三内閣と同じく戦後レジームの解体です。正確には、戦後直後の非軍事化と民主化に根差した福祉国家体制の解体です。学会の多数派ではないにしても多くの学者・福祉実践家が1990年代以降の基礎構造改革を「措置から契約へ」という言葉で正当化しました。その象徴である介護保険制度は要介護度認定という「措置」を温存して開始されました。介護の社会化と必要な介護を必要な高齢者に、というスローガンはオレオレ詐欺よろしく、保険料の高額化、要支援者へのサービスの保険制度からの排除、相対的高所得高齢者の負担増などが打ち出されています。こうした方向を無批判に支持・黙認することは「福祉学」の自殺行為ではないでしょうか。

「全共闘世代」なら反体制的であることが第1の原則かもしれませんが、50年も昔の出来事です。ピースミールの変革を行うためには、現実への批判的な態度は必要だと思われます。福祉学という幅広い学問の領域に歴史的な観点が必要なのは、現実に埋没せずに歴史の中に他の可能性（オルタナティブ）を別出する冷静な役割が期待されています。このことを室田さんが社会福祉の歴史の研究・教育で果たされました。室田さんが教授としては関西学院大学からは去られるにしても、福祉の歴史学研究の重要性は、関学の中で引き継いで受け継がれていくものと期待しています。室田さんもそのための努力をなされることでしょう。活躍を期待しています。